

## 4. 「牛車」乗車体験記

牛車をご存知だろうか。前近代に牛に引かせた貴族の乗りものであり、平安時代に最も多く用いられた。その牛車も、現在では、葵祭や神社の祭礼などのごく限られた機会にしか姿を目にすることは出来ない。

今年5月、葵祭を間近に控えた京都を訪れ、宮内庁京都事務所の協力の下、葵祭に使用される牛車2台のうちの1台(八葉車)に試乗する機会に恵まれた。そこで、古代・中世の人々が、牛車に乗りながら何を感じたか。私なりのささやかな体験をお伝えできればと思う。

間近に見る牛車は思いのほか大きい。車輪はゆうに2メートルはあろう。箱(牛車本体)の高さも大人の肩近くはある。したがって、牛車に乗り込む際には、「棧」と呼ばれる梯子を箱の縁に付けて上らなければならない。箱の内部は畳3帖ほどの広さで、天井までの高さは1.9メートル、左右の壁面は、花や鳥などを描き込んだ四季おりおりの風景画で飾られている。壁面には、物見(左右に開く窓)も付けられており、外の景色が眺められるようになっている。

少しの距離を人力で牽引していただいた。開いた窓からは、車輪に打たれた金物が回る様がよく見える。そして、車輪の回転に伴い、キーキーという独特な摩擦音があたりに響く。平安の都は、日夜このような牛車の音に満ちていたのだろうか。ゆるやかな時の流れに身をゆだねながら、しばし、当時にタイムスリップしたような感覚にとらわれた。

西洋文明の波が押し寄せる明治に至るまで、日本には何故、よりスピードのでる馬車が出現しなかったのか。その理由はいろいろと考えられよう。ただ、私には、貴族達が欲していたものが、牛車に乗った時に感じられた車輪の回転や音に象徴される「ゆるやかな時の流れ」であったのではないかと考えてならない。

(徳仁親王)



牛車(八葉車)に乗って - 右は同じく客員研究員の木村真美子氏



「杏葉車」全景



「八葉車」の内部

